

2017年(平成29年)

1月27日

金曜日



# 卒業少数派の麻酔科医に

医学部に入学して始まった東京での生活は刺激的で、新宿も渋谷も活況を呈していた。800万人ともいえる団塊世代が日本の高度成長を支えていたのだから、都会は人であふれ盛り場は朝まで眠ることはなかった。私立医大の学生は開業医の子

弟が多く、和気あいあいとのんびりとした校風だった。海のない奈良で生まれ育ったため、マリンスポーツに憧れ、ヨット部に入部。年間2カ月を千葉の館山で合宿したので、通算1年を海で暮らしたことになる。勉学がおろそかになるのは当然で、

毎年留年におびえていた。かろうじて6年で卒業、何とか医師国家試験に合格したが、何科の医者になろうか悩ましかった。ちょうど医師数が倍増すると言われた時代である。教授からも先輩からも「何でも診るような町医者ではなく専門医になれ」と厳しく指導されていた。当時、外科の一領域だった麻酔が独立して専門医制度が始まっており、少数派の専門医のハー

ドルは低いだらうと麻酔科で臨床研修を始めた。不勉強で内科医になる自信がなかったということもあった。その後、麻酔科ひびやくか標榜医ひびやくいという資格を取得するが、厚生省の認定証の番号は3千番台で、日本にわずか3千人程度しか、麻酔科を名乗れる医師がいなかったことになる。麻酔科医の仕事は、手術時の麻酔だけではない。痛みのコントロールや、生きるか、死ぬかという状況での救急救命の専門家でもある。ここでの技能習得や臨床体験が現在の出前医療にたいへん役立っているのはいうまでもない。(次回2月3日)

## とちぎの風

### 人生支える在宅医療

### 太田秀樹 ③



おおた・ひでき 1953年、奈良市生まれ。自治医大大学院修了。92年「おやま城北クリニック」開業。現在は医療法人アスムス理事長として在宅医療を推進。